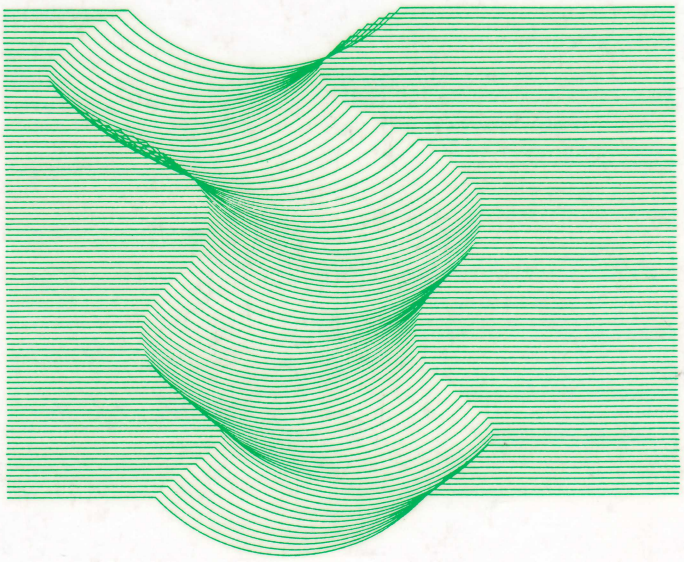
自分史

航跡



ごあいさつ

私が小児科医になって４０年、柳井市で開業して既に３０年の歳月が経ちました。

その間、子ども達の育児相談や健康相談・予防接種・病気の治療など直接に、また、学校や幼稚園・保育園、保健センターなどでの講義や講演など間接的に、多くの方々と共に子ども達に関わるいろいろな問題に取り組んで参りました。

私は人生の定年を密かに６３歳と勝手に決め、定年までの歩みを一応人生の節目として、その間の境遇において自分の考え方や行動などを綴った雑文や論文７０編余りの記録を集録して、この度　自分史「航跡」なる文集を発刊することにしました。

人生８０年時代、定年といっても節目というだけで、まだまだ鼻たれ小僧、お蔭様で元気にしています。

今後は人生を楽しみながら、より社会に貢献したいと考えています。今後とも宜しくご指導ご鞭撻の程お願い申し上げまして、自分史「航跡」発刊のご挨拶と致します。

平成４年１０月　　1992年

松　田　昭　正

目　　次

ごあいさつ

私の履歴 …… 5

自分史 …… 6

乳幼児の育児・保健関係

いまからの幼児保健 …… 11
父親学級の開講によせて …… 12
乳児保健の現状と将来 …… 15
子供の発達とその周辺 …… 17
こどもは未来 …… 23
子どもの心の健康雑感 …… 32
両親学級開講10年 …… 36

学校保健関係

最近思うこと …… 41
学校検尿　その後 …… 44
学校検尿について …… 45
学校医の立場より見た学校保健の諸問題 …… 50
思春期の心とからだ …… 55
生活習慣と健康 …… 59
学校保健の展望 …… 61
学童の心臓・腎臓検診について …… 64
学校保健の今日的課題と実践 …… 66
健康の自覚 …… 72
今からの学校保健 …… 75
発育期のスポーツ …… 79

小児に関する学術関係

小児科医と深夜急患 …… 85
風しんについて …… 88
柳井地方の風疹流行について …… 91
溶連菌感染症の臨床 …… 96
学校検尿とその事後措置 …… 100
乳児死亡とその周辺 …… 106
成人病予防より見た学校保健 …… 110
問診票の見直しと学童の体温 …… 117
山口県における幼保園嘱託医とその対策 …… 124
「こころ」の健康に関する健康診断 …… 126
学校で管理指導を要する子どもの早期発見 …… 132
発育期のスポーツ医学 …… 137

医師会関係

休日応急診療医の今後のあり方 …… 153
研修会のあり方について提案 …… 156
新年に思う …… 157
休日応急医と救急教育 …… 159
風しんワクチンについて …… 162
新しい年を迎えて …… 163
学校医の法的地位と職務内容 …… 167
学校医などの公務災害補償について …… 170
自主・自律 …… 175
活字との出会い …… 176
県医理事就任にあたって …… 178
新理事プロフィール …… 180
県医理事1年をふりかえって …… 181
県医理事6年を顧みて …… 185
学童の突然死回想 …… 190

その他　雑　文

不治の病に光明 …… 195
最近思うこと …… 196
昭和１ケタ　今日この頃 …… 197
近　　況 …… 198
人間ドック体験記 …… 199
最近の話題から …… 202
小児科医会は今何を …… 203
園医・学校医の調査分析より …… 205
余　　滴 …… 206
日本の総人口123～９人 …… 206
山口県の出生率は全国最低 …… 206
肥満とは …… 207
低身長 …… 207
低身長 …… 208
学齢期シンドローム …… 209
扁桃肥大の診断 …… 209
体脂肪率 …… 210
悠久なる歴史にふれる中国の旅 …… 211

新聞・その他の記事より

風疹ルポルタージュ …… 219
文部大臣表彰受賞 …… 230
柳井市教育委員就任・教育委員長就任 …… 231
学校保健に寄付 …… 232
紺綬褒章受章 …… 232

一般講演演題集 …… 235

柳井ロータリークラブ関係

略　　歴 …… 241
柳井ロータリークラブ会報より …… 242
新会員紹介 …… 242
海上教室に参加して …… 243
幹事就任にあたり …… 244
子供連れ原子力発電所見学 …… 245
和 顔 愛 語 …… 246
1989～90年度の回想（会長年度） …… 247

趣　　味

小　　唄 …… 251
春日派小唄　美都栄会 …… 251
広島名流小唄会 …… 252
山口県医師会小唄同好会 …… 252
ゴ ル フ …… 254
日本刀鑑賞 …… 254

家 族 紹 介 …… 255

あ と が き

私の履歴

まつ　だ　　あき　まさ
松　田　　昭　正　　昭和４年２月６日生（1929）

現住所　山口県　柳井市　古市　3715番地
本　籍　山口県　柳井市　日積　4175番地

略　歴

昭和26年（1951）	山口県立医学専門学校（現・山口大学医学部）卒業
26～27	国立東京第二病院インターン
27	医師国家試験・合格
27～	山口医大付属病院　小児科副手
28～34	〃　小児科助手
34～36	山口大学医学部　小児科講師
36～現在	現住所に小児科医院開業
	医学博士
	日本小児科学会認定医
	日本医師会認定健康スポーツ医

役　歴

昭和37～現在	日本小児科学会　山口地方会　幹事
42～現在	山口県小児科医会理事・平成３年副会長
47～現在	柳井市就学指導委員会委員・53年委員長
47～平成 2年	柳井医師会理事
59～〃　2年	山口県医師会理事・63年常任理事
59～現在	山口県学校保健連合会理事
平成元～現在	柳井市教育委員会教育委員・3.4年教育委員長
2～現在	柳井医師会議長
2～現在	柳井市学校保健連合会会長
4～現在	柳井市公害対策審議会会長

賞

昭和62年	文部大臣表彰
平成 2年	山口県医師会役員永年表彰
3年	紺綬褒章

自分史

子どもと共に40年

最近の子どもは、あまり泣かないし笑わない。「お利口な子」と言えば聞こえはいいが喜怒哀楽の表情が今一つ乏しい。サイレント・ベビー、学齢期シンドロームなどと呼ばれる一連の異常ではないが将来気掛かりな子ども達がいる。

毎日、多くの子ども達と接してその生活を見ていると、母親と一緒に遊んでいる時でもテレビをつけている。テレビは音声も一様で抑揚に乏しく、一方通行で次々に画面が変化し待ってくれない。こんな慢性的刺激に慣れているのかも知れない。子どもの発達に応じてテレビの効果的利用をもっと真剣に考え、親子の「心の絆」と信頼感を育てて欲しい。

また、昨今は少産・核家族で子育ての変革かも知れないが、もっと子どもらしく活発であって欲しいと願っている。私たちの子どもの頃に比べ、最近は外で遊ばない遊ばせない、運動不足、日光不足のモヤシ現象か、食生活や社会環境の変化に適応出来にくい弱者現象か、家庭や社会生活の夜型異変による生理的なリズムの転換現象か、或いは、それらの複合的な影響なのか気になる毎日である。

＊　私の少年時代

私は大島郡の片田舎に生まれ育った。少年時代は体が小柄で、山野を駆け回る活発なバンビ少年であった。農耕する父によくついていって、子どもなりによく手伝いもしたと思う。

ある日、父は見晴らしのよい山の上に私を誘い、弁当を食べながら、あの海の向こうにジカタ（本州）がある。日本は広い、東京や大阪など賑やかな都会がある。「今からは勉強して大きく羽ばたくんだ」と、自分の夢を幼鳥に託すように語ってくれたのを今でも昨日の事のようによく覚えている。兄が学校（神戸高等商船学校）を卒業するので今度は「お前に学資を回すことが出来るよ」と付け加えた。でも、その翌年の春は予期せぬ事が起こり期待に添えなかった。

それは学校の滑り台で足を骨折し、田舎のことで処置が遅れ長期入院となり、昭和１７年春、高等科から安下庄中学校に進んだ。

３年生の始めから４年生夏の終戦まで、学徒動員で岩国の陸軍燃料廠に動員され勉強どころではなかった。２０年５月の大空襲で９名の級友が犠牲になったことは今で

も心が痛む。翌２１年、受け持ちの立川先生に受験を勧められ、運良く四修で医学の道に進むこととなった。

＊　上京してＵターン、母校へ

混乱する終戦後の生活は食料難、物資不足で喘ぎながらも２６年春卒業し、インターンは念願叶って国立東京第二病院で行うことができた。父から聞き、希望に燃え、憧れの東京生活も１年で終りを告げ、悲運とも思われた方向転換で母校に帰った。今でいうＵターンである。その理由は、学生時代から単に「子どもが好き」というだけで将来小児科医を目指していた私に、小児科桜井医長は東京の病院はどこでも学閥があって、地方からの人はいくら勉強し努力しても「うだつ」が上らない。勉強するんだったら母校に帰ってみっちりやるのが一番だと諭された。

母校小児科芳野前教授を入院先の山陽荘に訪ねると、前教授は「沢庵を齧ってでも今勉強することだ」と励まされ、その足で小児科学教室に浅野教授を訪ねた。教室員に温かく迎えてもらい無給副手という肩書で即日入局した。医局の先輩の配慮により約１年間当直室で生活することになり、お陰様で大いに勉強する事ができた。

教室では、午前中は外来診療を手伝い、午後は入院患者の主治医として診療や検査など、夜が研究の時間に当てられた。教室の研究テーマは血液一般、特に鉄代謝についての臨床的な面と動物実験で、私は「感染性貧血について」のテーマを頂き、夜遅くまで研究に励んだ。３４年、学位論文集の表紙裏に「知識は人を誇らしめ、愛は徳を立つ」と浅野教授の添書とサインを戴いた。温厚篤実な教授をいつも思い出し、何時までも心に深く刻み、座右の銘としている。

小児科学は明治２２年、東大で初めて独立科となり、子どもの育児相談、予防接種、疾病の治療、教育の四本柱で開講したのです。今でこそ健康教育は一般的な事ですが小児科ではスタート時点から提唱されていたのです。この事が私の生涯を治療医学から更に進んだ幅の広い方向に導いてくれる基になったと言えます。

昭和３６年当時、野球の選手で十年選手という言葉が流行りました。私も将来の身の振り方を考え、現在地に小児科医院を開設し一国一城の主となったのです。

＊　地域医療に専念

開業以来、四本柱をいつも心に留めて体力の続く限り頑張りました。当時は救急当番医制などはなく、専ら２４時間体制で孤軍奮闘するしかなかったのです。因みに４３年から４８年までの深夜救急患者は一夜平均１．３人（４３年８月は最多の７６回）で、毎夜１～２回は深夜急患で起され、多い時には３～５回にも及ぶ過酷な毎日で超人的な精神力と肉体労働であったと言えます。

深夜急患の７割が有熱患者であり、けいれん、喘息、腹痛など各１割の患者さんについての調査結果を踏まえ、壁新聞やパンフレットを自作して患者教育、健康教育に力を注ぎ、「子どもの急病とその心得」なる冊子を作り、説明と同時に不安を取り除くために冊子を無料配布し納得して頂き、深夜急患の減少に努めてきました。各地域に現在のような休日夜間救急センター制度が出来たのはかなり後のことで、そのきっかけとなる基礎資料に役立ったことは言うまでもありません。

＊　医師会役員として

４７年より柳井医師会の理事となり、担当の医師会活動の他に子どもの為に何が出来るかを常に考え、自分一人で力の及ばない面を医師会全体で対応するには、どうしたらよいか友人と討論しながらいろいろな事を進めて参りました。しかし、なかなか事は捗らず、遂に５９年にはもっと高い次元で行政と対応して行くのが最も良い方法ではないかと考え、県医師会理事に立候補しました。

理事になって、最初に保育園・幼稚園と学校保健との連携問題、学校検尿のシステム化と精密検査方法や事後管理指導など、次いで学童の心臓検診の普及向上と学校管理下での突然死問題など大きく三つの課題に取り組んで参りました。

また、わが国が高度経済成長の波に乗って、文明型人間形成障害、人間不信などと呼ばれるように家庭、学校、地域社会環境の急速な変化が指摘され、いじめ、不登校などが急増する中で「こころ」の健康問題が大きくクローズアップされてきました。その対策についてもこころを痛めました。幼保の問題が一部未解決ではありますが他はお陰様で順調に運びそれなりの成果があがっています。

＊　子どもの健全育成を願って

地域に於ては「子どもを持つ喜びと親の心構え」について両親学級を保健センターで年２～３回夜間に開講し、子育ての基本についての勉強会を始めて既に１０年を経過しております。

顧みれば、私と子どもとの関わりは、ほぼ１０年単位で変革脱皮しています。最初は大学で小児科学・小児科診療の基礎を学び、次いで開業して地域医療に専念し、次は地元医師会役員として、後は県医師会役員や市の教育関係を通して子ども達の健康、教育問題など健全育成に関わってきました。

人生の岐路に立った時、よき先輩や恩師に巡り合えた事に感謝し、自分で決心したらまっしぐらに努力し、己を信じ人を信じ、自己に厳しく他人に優しく、いつも心は明るく「和顔愛語」をモットーに、今後も子どもと共に生き続けるつもりです。

泉　（山口版）　平成４年９月　掲載